

《特別寄稿》

農耕文化の異なる論理

— 二つの事例から —

佐々木 高明*

世界の各地には、例えばヨーロッパの畑作文化、インドの稲作文化、華北の畑作文化、アマゾンの焼畑文化などのように、それぞれ特色のある農耕文化がある。それらは各地の自然環境や社会的条件に適応した農耕技術に支えられ、固有の歴史的背景を有して発展してきたものだが、これらの農耕文化には、特有の価値体系に裏付けられた固有の論理がある。例えば西欧やインドや日本などの諸文明には、その基礎にある農耕文化の中で生み出されてきた特有の考え方があり、それは必ずしもアフリカやラテンアメリカや東南アジアなどの諸地域の農耕文化の論理と一致するわけではない。

この程度のことは、『農耕の技術』の読者の方々ならよく御存知のはずである。しかし、現実の問題に即して考える場合には、この自明のはずの事実が、よく理解されていない場合が少なくない。私は改めて、そのことを思い知らされた経験がある。

I. 熱帯森林を破壊する元凶は焼畑民か

2年ほど前、農水省の主催する気候の変動を考える研究会で、熱帯林の減少と焼畑農耕との関係について話したことがある。最近の熱帯林の減少の大きな要因の一つが、「焼畑耕作による森林破壊である」という説について意見を求

* ささき こうめい、国立民族学博物館

められたものである。

この熱帯における森林破壊の最大要因を焼畑に求める説は、国連食糧農業機関（FAO）と国連環境計画（UNEP）による『熱帯林資源評価報告書』が、そのもとになっているらしい。この報告の基礎になった調査は、FAOがUNEPの協力のもとに実施したもので、世界の熱帯地域76ヶ国を対象とし、各国政府から提出されたデータを統一的な基準によって整理し、さらに人工衛星ランドサットのデータをコンピューター解析するなど、従来みられなかった大へん包括的な熱帯森林の調査だとされている。

この調査報告書によると、1981～85年間の熱帯林の年平均減少面積は1,130万ヘクタール、そのうち他の土地利用に転換されたものは620万ヘクタール（約55%）で、残りの約510万ヘクタール（45%）は休閑林だという。休閑林とは「耕作のために伐採されたのち放置され、再び樹木に覆われると思われる林地」のことで、この種の休閑林が減少した熱帯森林の45%を占めることから、熱帯林を破壊する元凶の一つは、焼畑移動耕作だということになったようである。その結果、例えば「世界の熱帯林減少の45%、熱帯アメリカのその35%、熱帯アフリカのその70%、熱帯アジアのその49%が最終的には焼畑耕作によるものであるという事実は注目すべきである」〔井上、1988〕という結論が導かれることになる。

リモートセンシングのデータによって、どの程度まで正確に焼畑による休閑林であることが認識できるのか、私はこの点に大きな疑問を感じているが、その技術的な問題を論ずる資格は私にはないので、この問題にふれないでおく。しかし、長年、焼畑農耕の研究に従事してきた経験によると、世界の熱帯林の年間破壊面積の約45%が、焼畑農耕民によるものだという説は、容易に信ずることはできない。

（1） 森とともに生きる焼畑民の論理

一般に伝統的な焼畑農耕民は森林とともに生きてきた森の民である。東南アジアの例によると、彼らは一般的に森林を伐採・火入れしたあと1～3年（平

均2年)間作物を栽培し、8~15年(平均約12年)ほど休閑し、再び森林が再生したあとを焼畑にして生活している。この森林-焼畑耕地-休閑-森林のサイクルが、その生活にとって大切なことは、彼ら自身よく承知している。そのため、火入れの際には必ず、耕地の周囲に約2~3メートル幅で可燃物をきれいに取り払って防火帯をつくり延焼防止につとめているし、一回の火入れ面積も焼畑の延面積が一世帯当り1.5ヘクタールほどになる程度の面積の森林を伐採して、火入れを行うのが通例である。約1.5ヘクタールという焼畑耕地面積は平均的な世帯(成員5人)が生活するための収穫を確保するのに必要な面積であるとともに、一世帯で経営しうる焼畑耕地面積のほぼ限界(この場合のリミティングファクターは除草に要する労働力とみてよい)に当たると思われる。したがって、伝統的な焼畑農耕民の場合には、必要以上の面積をむやみに拡大しようとすることはない。

また、焼畑は原則的には無耕起農耕で、雑穀類を散播するか、陸稲やトウモロコシを穿孔点播か、イモ類を穴植するのみで、土壌の攪乱は少ない。このため雑草の生育は著しいが、土壌の侵食・流出はある程度防止され、それが植生の回復に役立っている。事実、東南アジアの焼畑での観察例によると、2年目の焼畑耕地は、周囲からの雑草や幼樹の侵入により初年目の面積の15%ないしそれ以上は縮小するとみられている。つまり、伝統的な焼畑耕地では、その作物栽培期間中から植生の回復が始まっているといっても過言ではない。

焼畑の休閑期間については、森林植生が十分に回復するまで待つことの必要性を伝統的な焼畑民たちはよく知っている。「樹木が焼畑の周囲の垣を作るに適した大きさに生育するまで」といった具体的な植生回復の目安を語ってくれるものも少なくない。本来、彼らは、森林の回復を待って次の焼畑耕地を造成することを原則にしているのであり、豊かな林地を伐り開いた焼畑耕地では、雑草の生育は少なく、収穫の多いことを彼らはよく知っている。

そのうえ、伝統的な焼畑民たちは、その表現にはさまざまな地域差はあるが、いずれも焼畑を拓くに当たっては、その森を「森の主(ぬし)」あるいは「森の精霊」(それぞれ固有名詞をもつ)からゆずり受けて一定の期間、作物の栽

培が行えるものと信じている。そのため、彼らは耕地の選定、伐開、火入れなどに先立ち、様々な儀礼を行い、供犠を営み、唱え言（呪詞）をとなえて森の神々や森の精霊たちに祈るのである。この場合、森の神々は日本の山ノ神がそうであるように力の強い恐ろしい神々であることが多い。したがって、焼畑を営む人々は恐れと敬いをこめて、真剣に森の神々に祈る。したがって、作物栽培が無事終わり、耕地を放棄したあとは、再び土地は森の神々のもとに戻されるのである。

このようなシンボリズムに支配された伝統的な焼畑農耕民の文化の中には、森を破壊する論理はまったく存在しない。彼らは本来、森林とともに生きる「森の民」なのである。

（2） 熱帯森林を破壊しているのは誰か

では、熱帯森林を破壊しているのは誰なのか。リモートセンシングのデータで明らかになった年間約510万ヘクタールに及ぶ「休閑林」をつくり出しているのはいったい誰なのか。私は少なくとも二種類の人たちが、それに関係していると思う。

その第一は伝統的なやり方では焼畑が営めなくなった人たちである。伝統的な焼畑民の社会にも、衛生状態の改善や生活必需物資の入手が相対的に容易になるなど、近代化の影響が及び人口の著しい増加の傾向がみられる。ところが、他方では定着農耕民や木材業者などによる森林の伐採や囲い込みがすすみ、焼畑民の利用し得る森林面積に限られるケースが少なくない。その結果、人口圧の上昇によって土地利用率が高まり、耕作期間の延長→植生の悪化という悪循環が進み、森林の喪失に至る例が、インドや東南アジアでもよくみられる。

また、商品経済の発達に伴い、伝統的な焼畑民の一部が、例えば阿片の原料になるケシなどを集中的に栽培する例がある。この場合には広く森林を伐開し数年以上にわたりケシ栽培をつづける掠奪的な農法をとるため、森林の再生はきわめて困難になる。北西タイのメオ族などにこの種の焼畑の例が報告されているが、その場合にもこの掠奪的な農法を実際に推奨しているのは、都市の商

人たちであることを忘れてはならない。伝統的な焼畑農耕社会の中には、休閑期間を過度に短縮したり、掠奪的農法を営む論理はもともと存在しなかったのである。

だが、このようないわゆる近代化に伴う焼畑社会の変化に起因する森林の喪失にも増して重要なのは、人口密度の高い成熟した農耕地帯から移住してきた大量の農業移民たちによる熱帯森林の開墾の影響であろう。開墾に際しては、熱帯森林を広い範囲にわたって伐採・火入れし、その後には作物を栽培する。このため一時期に限ってみれば、土地利用上の特色は焼畑と同様にみえる。しかし、永久耕地や牧地の造成を目的とする農業開墾と休閑・輪作を前提とする焼畑とは農耕の様式も異なれば、その背後にある論理も異なるのである。

つまり、ランドサットが捉えた同じような土地利用形態、森林破壊の景観であっても、焼畑と農業開墾では同列に論ずることはできないのである。

それでは伝統的な焼畑と農業開墾による森林破壊はそれぞれどの程度の割合を占めているのか。この点が知りたいところだが、それはわからない。そもそも、そういう問題点を把握して調査していないから資料がない。だが、推測は可能である。資料は少し古いがFAO調査によると、1976～80年に熱帯アジア諸国で森林減少面積が最も大きいのはインドネシアで年間約55万ヘクタール、その減少率は年率0.5%、森林減少率の最大はネパールで年率約4.3%で、その面積は約8万ヘクタールだという。

このうち、ネパールについては、焼畑は中間丘陵地帯の南部の一部で少し営まれている程度で、その面積は必ずしも大きくはない。むしろネパール全体としては、人口の急激な増加、とくに中間丘陵地帯を中心に著しい人口過剰現象がみられることが問題になる。1981年の人口統計によると、北部の山岳地帯や中間の丘陵地帯から約70万人に及ぶ人口が、南部の熱帯低地（タライ）に移動している。おそらくその大半は農業移民で、彼らの多くがタライの熱帯森林の伐開にかかわったものとみて間違いない。その当時、東部ネパールのタライ地帯を横断した私は、農業移民による大規模な熱帯森林の伐開・開墾が行われていた事実を目撃している。

同じようにインドネシアの場合も、カリマンタン（ボルネオ）やスマトラなどの熱帯森林の喪失に重要なかわりをもったのは、伝統的な焼畑民ではなく、ジャワ島などの人口過剰地帯から押し出された農業移民である可能性が大きい。いまその詳細を検討する余裕はないが、少なくともインドネシア政府は戦後一貫してカリマンタンやスマトラの「未開拓地」への農業移民を送り出す政策を推しすすめてきた。1970年、第一次開発5ヶ年計画が施行され、移住事業が本格化した。それ以降をとってみても1985年頃までの間に約90万世帯の農家が、ジャワを中心とした「成熟せる農業空間」から「開拓空間」へ移行したことが知られている。

開拓空間へ移行した農民は、一世帯当り2～数ヘクタールの土地が割り当てられ、その多くが熱帯森林の伐採と開墾に従事したことはいう迄もない。その結果、多くの熱帯森林が焼き払われ、破壊された。一部ではゴム林や油ヤシ林などが造成され、人工的に植物被覆は回復されてはいるが、このような商業的人工林の拡大により、伝統的焼畑民の利用空間が狭められ、前にも述べたように、休閑期間の短縮による林相の悪化を導き出している例も少なくない。

いずれにしても、森と共に生きる焼畑民と異なり、農地開墾を行う農業移民たちにとって森は開拓すべき対象であり、取り除くべき邪魔物にすぎない。伐開・開墾を行う農業移民たちも、その郷里では土地や森の精霊に敬けんな祈りを捧げる人たちなのだが、新しい開拓地では、そうした価値観は放棄され、遠慮会釈なく森を伐り倒し、無制限に火入れする例が少なくない。開拓民の論理は、森と共に生きるのではなく、森を殺して生きようとするものなのである。

熱帯アジアだけではなく、熱帯アメリカや熱帯アフリカでも、熱帯アジアに優るとも劣らない規模で、この種の農業開拓民による熱帯森林の破壊が大規模に進行している。しかも、その多くが当該地域の各国政府の推進する農業移民計画と深いかわりをもって進行していることを、私たちは銘記すべきである。「熱帯林の破壊の約45%は焼畑耕作によるもの」というと、森林破壊の責任の大半が少数民族の焼畑民にあるかのように聞こえるが、事実はまったく異なることを、私は強調しておきたいのである。

(3) 森林への敵対と共存—農耕文化ごとに異なる論理

ところで、FAOにしても、UNEPにしても、国際機関の職員のかかなりの部分はヨーロッパ系の人たちによって占められている。これらの人たちの共有する文化の基礎をなすヨーロッパ型の農耕は、もともと西アジアのオープンランドで発生した農耕様式であり、森林地帯にはいると、森を焼き払い、伐り開いてオープンランドをつくり、そこを畑地や牧地に利用して発展してきたものである。歴史地理学者の研究によると10世紀ごろまでは、中部ヨーロッパにはまだかなりひろく森が存在していた。ところが、中世のいわゆる「大開墾時代」以降、ヨーロッパの森林は急速に破壊され、近世初頭ごろにはその大半が消滅してしまったというのである。ヨーロッパの農耕は、森のカミを殺し、森を伐開するところに伝統の原点があったとすることができる。

つまり、ヨーロッパ型の農耕民と熱帯地域の農業移民たちの森林に対する論理は、基本的に同じものであったといえるのではなからうか。事実、熱帯アメリカや熱帯アフリカなどで、森林を伐開して牧地を造成するという生態学的(エコロジカル)には無謀ともいえるような開発計画がいくつもみられるのは、ヨーロッパ型の農耕をそのまま熱帯に適用しようとしたよい例だといえるだろう。さらに、さきほどから強調しているように、FAOなどの国際機関は、熱帯森林の破壊の原因を農業開拓民の伐開・火入れに求めず、焼畑民のそれを強調しているが、その背後には、ヨーロッパ系の人たちの心の中に農業開墾による伐開・火入れを肯定的に容認する論理がひそんでいるからだともみることができないだろうか。

ヨーロッパ型の農耕に対し、モンスーンアジアの水田稲作農耕は、盆地床や氾濫原や三角州の一部など、もともと大きな森林が広がっていなかったニッチを開拓して、水田の造成を行ってきたものである。しかも、その水田で稲の生育を保護する田ノ神は、春に山(森)から降りてきて、田や里にとどまり、秋には山(森)へ帰ってゆく神である。つまり、水田稲作民は、その開墾の形においても、その信仰においても、また現実に森林の下植えを刈り取って水田の肥料(刈敷)とすることがかつては多かったという点においても、森林と敵

対するものではなく、森との共存をその固有の論理としていたとみてよい。

このようにみえてくると、それぞれの農耕文化によって森林に対する価値観や論理がかなり異なっていることがわかる。熱帯森林の保護を含め、さまざまな環境問題に正しく対処するためにも、こうした農耕文化ごとに異なる論理の違いを正しく把握しておくことが必要なのではなからうか。

Ⅱ. 日本的稲作文化の特殊性・米への異常傾斜

(1) 農耕文化の三大類型

世界の農耕文化は、大きくまとめると三つの大類型に整理することができる。その一つは根栽農耕文化。東南アジアからメラネシアにかけての熱帯森林地域では、きわめて古い時代にバナナ、タロイモ、ヤマイモ、サトウキビ、ココヤシなどの栄養繁殖作物（種子によらず、根分け、株分け、挿芽などにより繁殖する作物。根栽作物ともいう）が栽培化され、これらを主作物とする焼畑農耕に基礎をおく特有の農耕文化が形成された。いわゆる根栽農耕文化である。その後、この農耕文化は主として東南アジアの東部からオセアニア地域を中心に展開した。

また西アジアの冬雨のステップ地帯の一部であるいわゆる「肥沃な半月地帯」では前8000年紀ごろに小麦・大麦・エンドウ・ソラマメ・ダイコンなどの冬作物の栽培化と羊・山羊などの家畜化が進み、農耕と家畜飼養が有機的に結合した特有の麦作農耕文化が生まれ出された。その後、前5000年紀ごろには牛の家畜化と乳利用や犁耕の発達が見られ、さらに灌漑組織の発展に伴い、この文化はメソポタミヤやナイル河谷一帯にひろがった。そこで古代オリエントの文明を生み出すとともに、今日のヨーロッパ文明の基礎を形成したことはよく知られている事実である。

さらに第三の文化として注目されるのが雑穀農耕文化である。アフリカのサハラ南縁のサバンナや中央アジアから北西インドに至る半乾燥地帯でモロコシ、トウジンビエ、シコクビエやアワ、キビなどの夏作のイネ科穀類（millets, 雑

穀類)をはじめ、ナスやウリなどの果菜類、各種の豆類、ゴマなどの油料作物などが栽培化され、これらの作物を混作する特色ある農耕文化が形成された。この農耕文化は、アフリカのサバンナ地帯に広まったばかりでなく、インドの中南部から東アジアの照葉樹林帯を經由し、あるいは中央アジアから南シベリアのステップ地帯を經由して東アジアに伝播し、東アジアの農耕文化の基礎を形成したものと注目すべきである。

黄河流域に前6000年紀ごろから発達し、中国の古代文明を支えた農耕も、東アジアの各地の少数民族が伝統的に営んできた農耕も、いずれもアワ、キビなどを主作物とする雑穀栽培型の農耕であった。この種の雑穀栽培は、常畑の形をとる場合でも、焼畑で営まれる場合でも、古くは鋤や鍬を主要な耕作具とし(犁は麦作農耕の影響とともに後に導入された)、各種の雑穀類やその他の作物の著しい混作が行われることが、その大きな特色であった。

(2) 稲は雑穀の一種として起源した

ここで何よりも注目すべき点は、現在、東アジアでもっとも重要な作物になっている稲が、もともと雑穀の複合体 (millet complex) の中で起源したとみられる事実である。中尾佐助によると、アフリカの栽培稲 (*Oryza glaberrima*) もアジアの栽培稲 (*O. sativa*) も、ともに雑穀の複合体を構成する数ある夏作のイネ科の穀類の一つで、特有の「湿性のミレット」として雑穀類の起源地の縁辺地帯で起源したものだといっているのである [中尾, 1966]。

中尾の農耕起源論と稲の起源をめぐる学説は「雑穀農耕文化」という麦作農耕文化などに対応する農耕文化の大類型をみとめた点とその複合体の中で稲の起源を考えた点で世界的にみても、ユニークな学説だといえる。いま、その詳細を論ずることはできないが、欧米系の学者たちによる従来の農業起源論では、ヨーロッパ型農耕の直接的な祖先に当たるオリエントを中心にした麦作農耕の起源の問題に議論が集中し、そのほかの農耕については、ヴァビロフ以来、いくつかの農耕中心を指摘するのみであった。

それに対し C.O. サウアーが根栽型農耕と種子栽培型農耕の二つの大類型を

表 雑穀文化と麦作文化における作物名称の分化

	雑穀に関する名称の分化	ムギに関する名称の分化
雑穀農耕文化	粟, 黍, 稷, 稗, 稈, 稲 など種類ごとに固有の名称があり, 総称名詞がない。	麦という総称名詞のみがあり, 個別の種類には大小, 燕などの形容語をつけて区別する。
麦作農耕文化	milletという総称名詞のみがあり, 個別の種類には foxtail, common, finger, barnyardなどの形容語をつけて区別する。	barley, wheat, oat (s), rye など種類ごとに固有の名称があり, 総称名詞がない。
雑穀文化を中国(漢)語, 麦作文化を英語でそれぞれ代表させて対比した。他の言語で代表させても結果は同じ。		

設定し, その先後関係を論じたのはきわめてユニークな視点を提示したものであった。しかし, 彼の場合も, それ以降の研究者たちも — アフリカにおけるミレットの起源につき大きな研究をまとめたJ.R.ハーランを含め — 欧米の学者たちの間からは, 種子栽培型の農耕を, さらに冬作のイネ科穀類を中心とする麦作農耕と夏作のイネ科穀類を中心とする雑穀農耕に二区分するアイデアはついに生まれてこなかった [Sauer, 1952・Harlan, 1975]。

所詮, 欧米の人たちにとっては, 麦作農耕はきわめて身近なものであったのに対し, 夏作のイネ科穀類を中心とする雑穀農耕はほとんど親しみのない存在だったのである。そのことは, 東アジアとヨーロッパの言葉を較べてみてわかる。表のように, 東アジアでは雑穀類の呼称がよく分化しているのに対し, ムギ類については呼称がほとんど分化していない。それに対し, ヨーロッパで

はムギ類についての呼称がよく分化しているのに対し、雑穀類の呼称の分化はほとんどみられない。このような雑穀類についての文化的関心の低さが、欧米の研究者の間から、麦作農耕文化に對置すべき大類型として雑穀農耕文化の概念が生まれてこなかった理由と考えられるのである。

いずれにしても、夏作のイネ科穀類を中心とする雑穀複合体、あるいはそれに支えられた雑穀農耕文化の概念が、十分に把握されない限り、稲作起源の問題を的確に捉えることは不可能である。稲作の起源をめぐるのは、タロイモ水田と稲作水田の類似に注目して両者を姉妹作物と考え、この種の湿地性植物を馴化する過程の中から稲とタロイモの栽培化が進められたというような現実性のない仮説がいくつも提出され、しかもこの種の学説が欧米ではかなり受け入れられているようである。このような点に、私は稲＝米の問題をめぐる国際的理解のズレの原点の一つが見いだされるように思うのである。

(3) 水田稲作農耕の成立

ところで、アジアの栽培稲は、渡部忠世らの詳細な研究によって、アッサム・雲南から東南アジア北部にかけての高地で起源し、その後、このセンターから西に向かってはインド、南に向かっては東南アジア、東に向いては中国の長江流域地帯へ拡散したことが明らかにされている〔渡部、1977〕。この場合、栽培化の初期の段階では、稲は陸稲や水稲に品種分化する以前のいわば未分化な稲で、それが他の雑穀類や豆類などと混作されていたと推定されている。私はこの段階の稲作を「雑穀栽培型の稲作」と名付けることにしている。

ところが、稲は雑穀の複合体を構成する他の夏作のイネ科作物に較べ大へんすぐれた作物である。例えば味が非常によい。水田で栽培できるため無肥料で連年耕作が可能であるし、肥培管理すると収量を著しく高めることができる。また料理に当たっては粒が大きく、籾殻がとりやすいなど処理しやすい利点がある等々。このようにすぐれた作物であるため、稲は雑穀の複合体の中から、しだいに選り出され、畔をめぐるせた水田という特殊な耕地で稲だけが単作されるようになってくる。それに伴い、水田栽培に適した多数の水稲品種群が

くり出され、いわゆる「水田稲作農耕」が成立するのである。この段階の稲作を私は「水稻栽培型の稲作」と名付けることにしているが、この種の水田稲作の成立によって、特有の稲作社会が形成され、稲作文化が生み出されるようになるのである。

長江流域の稲作地帯ではすでに BC 5000年ごろから稲作が営まれていたが、雑穀栽培型の稲作から水稻栽培型のそれへの転換は、最新の発掘調査の結果から判断して、紀元前3000年紀中ごろすでにほぼ終了していたと考えられる。この長江中・下流域に成立した水田稲作農耕文化は、その後、紀元前1000年紀の中ごろ、たぶん山東半島の南あたりから朝鮮半島南部に伝わり、そこで北方からの青銅器文化の流れと一つになり、北部九州に伝来したと考えられる。他方、長江下流部から直接九州へ伝来した稲作文化の流れや南島の島々を経由した流れもあったが、そのウエートは必ずしも大きくはなかったと思われる。いずれにしても、これらの新しく日本列島に伝来した水田稲作文化は、土着の縄文文化の諸要素をその中にとりこみながら、一般に「弥生文化」と呼ばれる日本的稲作文化の原型に当たるものをつくり上げたのである。

では、日本列島に成立したこの稲作文化にはどのような特色がみられるだろうか。この点については、さまざまな面から分析を加えることができるが、私はここでは、日本の稲作文化には稲あるいは米への収斂が著しいという特徴のみられることを考えてみたい。そのためには、東アジア世界で農耕文化が形成されてくるころの状況を、もう一度よくみてみることにしよう。

(4) 東アジアの畑作文化と稲作文化の食料体系

東アジアの新石器時代の遺跡から出土した作物や家畜あるいは魚骨などの遺存資料を丹念に集成し、その分析を行った考古学者の甲元眞之によると、黄河流域の畑作地帯と長江流域の稲作地帯では、新石器時代の主要食料の獲得様式には大きな違いがみられるという [甲元, 1992]。

黄河流域の畑作地帯では、アワを基本にしてキビ、モロコシ、コメ、そして後にはムギが加わり、前にも述べたように、きわめて複合的な作物複合体が構

成されていた。また家畜についても、ブタ、イヌ、ウシ、後にはヒツジ、ヤギなども登場し、大へん多角的な家畜飼養がみられた。さらに狩猟についても、その対象獣の種類が多く、特定の動物に集中していない。つまり、黄河流域の畑作地帯の食料体系は、その利用する食料資源の種類が多く、きわめて多角的な特性を有していたといえる。

黄河流域に展開した畑作文化は、かなり早い時代にその分布域を北東に拡げ、いわゆるリョウトウナラ林の地域一帯にひろがっていた。だが、ハルビン-瀋陽を結ぶ線以東のモンゴリナラ林の地帯への影響は少なく、そこでは、紀元前1000年紀ごろに南シベリアを経由して伝わった北方系農耕の影響があり、アワ、キビ、ムギやカブの類を中心にブタやイヌ飼育を伴う畑作農耕がひろがった。しかし、ここでは後代まで、漁撈や各種の動物を対象する狩猟が大きな比重をもち、その限りにおいてやはり、きわめて多角的な食料体系が展開していた。

これに対し、長江流域の水田農耕地帯では稲作を基本にし、家畜飼育をあまり行わない生業形態を示していたという。それでもごく初期の段階（河姆渡遺跡や崧沢遺跡などのころ）では、稲のほかにハトムギなどが栽培されており、家畜についてもブタ（30%前後）をはじめ、スイギュウ（10%ほど）、イヌ（1%ほど）などが出土し、狩猟獣としてはニホンジカ（30%ほど）、シフゾウ（20%ほど）、キバノロ（14%ほど）などシカ科の動物が出土動物の60~70%を占めていたという。

ところが、水田稲作農耕がほぼ確立したと思われる紀元前3000年紀の馬橋遺跡などの例によると、ブタの出土量は全体の15%ほどに減り、逆にニホンジカが全体の50%を占めるに至っている。つまり、長江流域の新石器時代の遺跡では、稲作農耕が発展するに伴い家畜の比重が低下し、狩猟獣についてもニホンジカに集中する傾向がみられるという。さきの畑作地帯と異なり、この稲作地帯では食料資源の選択・利用の範囲が、稲作の発展とともに明瞭に狭くなる傾向がみとめられるわけである。

甲元眞之によると、この傾向は長江流域の稲作地帯では一般にみられる傾向

であり、稲作地帯の大きな特色の一つだという。さらにこのような状況の長江流域では、動物性蛋白質の供給源としてはアオウオ、ハクレン、ソウギョなどのコイ科の魚を中心とした魚類が大きな役割を演じていたことが注目すべきだというのである。

(5) 日本の稲作文化の特色

長江流域の稲作文化を原型とし、それにリョウトウナラ林帯から南下してきた青銅器文化の影響が加わって形成された日本の稲作文化は、当然のことながら生業形態については、上に述べたような長江流域の稲作文化の特色を継承しているものであった。というより、家畜飼育や漁撈の比重は、長江流域やナラ林帯のそれよりもかなり小さかったと思われるのである。最近、弥生時代初期のイノシシの遺骨（下顎骨）に歯槽膿漏の跡などが発見され、当時すでにイノシシの家畜化が進んでいたことが知られるようになった。つまり、日本列島の初期の稲作にもブタの飼育が伴っていたことが明らかになったのだが、その数は必ずしも多くはなかったらしい。

いずれにしても、日本列島における稲作は、初期の段階では、発掘された水田の規模やその他の状況から判断して、必ずしも大きな人口支持力を有するものではなく、当時の生業は縄文時代から引き継いだ雑穀やイモ栽培、あるいは採集や狩猟活動に依存するところが大きかったと考えられる。しかし、時代がすすむにつれ、鉄製農具類が出現し、水田の拡大、水利条件の改善などがすすみ、稲作の生産性が向上するとともに、稲＝米への依存の度合が急速に進行したようである。

そのプロセスについては、民俗学者の坪井洋文が、「モチなし正月」から「モチ正月」への変遷、あるいは正月儀礼や古い神社の祭礼の供物がイモや雑穀類からモチ（稲）へ変化する過程などを通じて明らかにしている〔坪井、1979〕。日本の稲作文化は、成立後のかなり早い段階から、稲あるいは米へ文化的に収斂してゆく顕著な動きをすすめてきたようである。その結果、伝統的な日本文化においては、大嘗祭などの例にみられるように、稲あるいは米が、宗教的・

政治的な意味において、きわめて象徴性の高いものとなったのである。

他方、日本列島の農耕社会では、乳用家畜はおろか、ブタなどの肉用家畜の飼育もほとんど発展せず、家畜飼育を伴わないきわめて特殊な稲作文化が形成されるに至ったことは周知の事実である。家畜飼育については、中国大陸では、その南部においても、古い雑穀文化の段階からブタ、イヌ、スイギュウなどの飼育が行われていたことが知られている。東南アジアや南西中国の焼畑民の間では、ごく最近まで、儀礼の際に大量のブタやスイギュウなどを供犠する慣習がみられたのは、このような家畜飼育の伝統が、雑穀栽培を主とする焼畑農耕の段階から存したことをよく示しているといえる。ところが、島国である日本列島には、この種の雑穀の焼畑と結びついた家畜飼育の伝統は、稲作以前の段階には伝来してこなかったようである。この点が中国大陸と異なるところである。

また、長江流域や東南アジアでは、水田養魚が古くから盛んであるが、日本の稲作にはその痕跡はまだ発見されていないし、また古い習俗などの中にもその伝統はみられない。したがって、淡水魚類の食文化体系に占める比重は伝統的に決して大きくはなかったといえる。このようにみえてみると、日本の稲作文化は、長江流域のそれに較べても、食料資源の選択・利用の幅がよりいっそう狭く、稲＝米への依存度がきわめて大きい特殊な性格を有していたことがわかるのである。

(6) 「主食」のある文化とない文化

このように、日本の稲作文化は、同じ稲作文化の中でも、特殊な食文化の体系をつくり上げてきたということが出来る。このような食体系の成立の基礎には、米が小麦や他の雑穀などに較べ必須アミノ酸をより多く含有した優秀な食品だという事実がある。この点を詳しく論じた篠田統によると、一日所要蛋白質量を米だけで補充すると一日約5合(750g)、パンだと一日約3キロを必要とするという。一日5合の米なら食べることはできるが、一日3キロのパンはどうてい胃袋には入らない。そこでパン食の場合には、アミノ酸を多量に含む

肉類などを食べて必須アミノ酸を補わねばならない。この場合にはパンと肉やミルクは主食と副食の関係ではなく、相補関係にあるという〔篠田、1970〕。

これに対し、米食の場合には、米の澱粉はカロリー源になるだけでなく、蛋白質も優秀だから必須アミノ酸を別に補ってやる必要はない。したがって、副食物は文字どおりの副えもので、副食はなくてもよいわけである。中世の絵巻物などをみても、大きな飯椀に目一杯に高盛りした飯を、貧弱な1汁・1～2菜で食べている状景をよくみかけるが、こうした状景は日本の稲作文化の食体系の特徴をみごとに示すものだとすることができる。こうして稲作文化 — とくに日本の稲作文化 — では、麦作農耕文化の流れをくむヨーロッパ型の食文化の体系にはない「主食」の概念と実態が作り出されてきたわけである。

「主食」と「副食」という概念は、われわれ日本人にとってきわめて日常的・常識的なものである。だが、その観念は他の農耕文化、とくに麦作農耕文化の中で育った人たちにとっては、理解しがたいものであろう。米をめぐる最近の国際的な論議の中で「食糧安保論」あるいは「米安保論」とでもいうべき主張が日本の代表によってなされていると聞く。もし、その主張が「米は日本人にとって、かけ替えのない《主食》である」という論理の上になって展開されているとすれば不幸なことである。そこで展開されている論理は日本の稲作文化に固有の論理であり、他の文化の立場からは、とうてい理解しがたい不思議な考え方であることを、この際よく留意しておかねばならない。

引用文献

井上 眞

1988 「熱帯林減少の背景—社会・経済メカニズム」『林業経済』41-10, pp.9-21.

中尾佐助

1966 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店

Sauer, C.O.

1952 *Agricultural Origins and Dispersals*, The American Geographical Society.

Harlan, J.R.

1975 *Crops and Man*, Amer.Soc. Agronomy.

渡部忠世

1977 『稲の道』日本放送出版協会

甲元眞之

1992 「長江と黄河—中国初期農耕文化の比較研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』
40, pp.1-120.

坪井洋文

1979 『イモと日本人—民俗文化論の課題』未来社

篠田 統

1970 『米の文化史』社会思想社